

4. ペーパーズの複製販売について

- ・気象研究所、日本気象協会及び当学会の3者で今後の取扱いについて協議の経過について中村理事から説明があり、審議の結果、第42巻4号をもって気象学会の事業としての販売を終了することが了承された。なお、43第1巻号から日本気象協会が当該事業を引継ぐ。

5. 委員の交替などについて

- ・気象集誌「アジアモンスーン特集」の編集委員会（任期：1992年3月まで）を組織することについて村上理事から提案があり承認された。
- ・気象集誌常任編集委員を1名追加すること及び後援企画委員会の委員交替について次の提案があり承認された。

記

気象集誌編集委員

追加 播磨屋敏生（北海道大学）

講演企画委員会

交替 新 隈 健一（数値予報課）

前 万納寺信崇（数値予報課）

6. 1991年度「山本・正野論文賞」候補者について

- ・選定委員会委員長廣田理事からの推薦を受けて審議の結果承認された。細則に基づき全理事の投票を行うこととした。

7. パソコン通信に会員名簿を公開することについて

- ・公開することの是非について審議が行われたが、賛成多数で了承された。

編集後記：この後記を書いている今は、うっとおしい梅雨の真っ最中だが、この号が出る頃には、8月の太陽がまぶしい盛りではないだろうか。

8月と言えば、昨年開始したつくばの高層気象台での有害紫外線（スペクトル）観測結果によれば、1年中で最も地上到達量（月平均日積算量）の多い月であった。太陽高度の高い、6、7月より8月の方が多かったのは、6、7月が梅雨期の曇天による減衰を受け少な目になったこと、及び6、7月の方がオゾン量が多くこれによる減衰のためさらに少なくなったことが原因と思われる。今年を含めて将来の推移が近年のオゾン層問題の中注目される。

ところで、紫外線観測を開始する契機ともなったオゾン層問題ではあるが、世界各国での数十年にわたる地道な観測の積み重ねがあつてはじめて、南極オゾンホールをはじめ、近年の異常の検出が可能となったのではないだろうか。継続的定常観測の重要性を示す一つの見本と思われる。

オゾンや紫外線、二酸化炭素をはじめとしたいわゆる地球環境の変化の監視には、根気強く精度を維持しながら観測を行っていく必要があるが、そのような努力が現在各方面で多種多様に払われ、着実に成果が蓄えられている。『天気』誌上にそんな成果が息長く掲載されていくことを期待したい。（下道 正則）